

<書評>

アメリカ人が語る：アメリカが隠しておきたい日本の歴史

マックス・フォン・シューラー

ハート出版（東京）、2016

評者：Tadashi Hama

マックス・フォン・シューラーのバイリンガル著書（パラグラフごとに英訳付き）には、二つの主要なテーマがある。一つは、タイトルから察せられるように、戦前の日本の、見過された（というよりは「隠蔽」された）歴史である。歴史とは見解の集合であるはずなのに、フォン・シューラーの指摘によると、戦前の日本側の歴史観は現代の歴史学では、ことさらに無視されている。日本が「侵略戦争」を行い、米国は正義のために「侵略者」日本を壊滅させたという米国の歴史観を守らなければならないからである。このように歴史的真実から目を背けてしまったために、日本人は、悲惨な戦争の責任は日本だけが負うべきだと信じ込まされたばかりでなく、自国にする不信感を抱かされるに至った、とフォン・シューラーは指摘する。同時に、そのために、米国では対日戦争に対する事実に基づかない神話的な考えが捏造されることになった。フォン・シューラーが探求する第二のテーマは、日本と韓国との関係である。日韓関係の本質とは、一言で言えば、韓国が事実に基づかない神話的な歴史を楯に取って日本叩きを続けているのに対して、日本がどう反応しているかの問題なのである。フォン・シューラーは、過去を客観的に振り返ってみると、米国も韓国も、道徳的に無垢の立場にあったと主張することはできないと主張する。共通の目的意識と共通の自己認識を与えてくれる共通の歴史を共有することができることこそが、人民の権利なのである。しかし、本書は、韓国も米国も、神話的な歴史のおかげで、自ら破滅に至る道を進むことになってしまったと示唆する。フォン・シューラーは、日本と韓国と米国の関係に焦点を当てているが、よく考えてみると、著者の二つの主題は、他の地域にも当てはまるのが解って来る。たとえば、中国である。

著者は米国市民であるが、米国の過去とかつての同国人の真の性質を暴露することに関して、いささかも手加減は加えていない。日本で40年以上暮らしたフォン・シューラーは、戦前の国際関係に於て、日本が果たした役割を、日本人の観点と外国人の観点との両方から反復して分析している。一つ一つの個別の出来事については、本書の記述は十分ではないかも知れない。しかし、フォン・シューラーは、探求心の強い読者のために、巻末に参照文献のリストを載せている。他に2点、初心者が20世紀初頭の日米関係の政治力学を理解するのに役立つような文献を紹介しておこう。その一つは、*Perpetual War for Perpetual Peace*（永続的平和のための永続的戦い），by Harry Elmer Barnes（Caxton Printers: Caldwell, ID, 1953）であり、今一つは *Freedom Betrayed*（Hoover Institution

Press: Stanford, CA, 2011) (『裏切られた自由』上・下 (渡辺惣樹訳) (草思社) (2017年) である。後者は、フランクリン・ルーズベルトが対日戦争に突き進んで行く様子を、人道主義と不干渉主義の見地に立つハーバート・フーバーが書いたものである。

特に目を引くのは、フォン・シューラーが日米戦争の間の米軍兵士の行動に言及している箇所である。戦時中の米国のメディアは、米軍兵士は「完全なる天使」だったと報道し、その後も一貫して国民にそう信じ込ませているが、実態は全く違ったものだったということである。本書は驚くべき事実を示している。太平洋で戦った米軍は、レイプを行い、日本兵の死体を切断し、死体の一部を本国の友人や家族に土産ののとして送ることさえしたというのである。米軍は降伏した日本兵を捕虜にしないのが常だった。降伏した日本兵はその場で射殺されたのである。日本軍が、日本の文化的伝統から、捕虜に対して侮蔑的な態度を取ったことは事実だったにしても、その点では米国も五十歩百歩だった。捕虜にいささかの慈悲も与えないという方針を取っていたと知ると、米国という国に対して幻滅を感じざるを得ない。日米戦争の間、米国側にも「慰安婦」制度があった。ハワイのホノルルのダウンタウンにある悪名高い「ホテルストリート」の様子を生き生きと描写して、その実態を報告している。州政府と警察と米軍が協力して、ホテルストリートで売春窟を経営しており、サンフランシスコから送られた売春婦が働いていた。本書はさらに、戦後日本に進駐した軍当局が、将兵の性欲を抑制することを目的として、売春窟を作ったことに触れている。この売春窟が閉鎖されると、レイプ事件が急増したとのことである。韓国でも似たような事態が出来た——朝鮮戦争の期間中とその後で、米軍は将兵のために、「慰安所」を設置した。

米軍のこういう行為を弁護する人もいる。GI (米軍の下士官兵) が政府公認の売春婦を利用したのは「男だから仕方がない」と言い、米軍の虐殺行為については、「日本の残虐行為に対する報復だから仕方がない」と言うのである。米軍は日本人捕虜を処刑し、その歯を引き抜くという蛮行を働きながら、「自由」と「民主主義」を標榜して戦っていた、とフォン・シューラーは指摘する。読者はこの皮肉に気づかなければならない——米国は自らの忌まわしい行為を弁明し、否認までして、躍起になって自己正当化に努めているのである——そして、フォン・シューラーは、本書の中で、ひるむことなく、繰り返し繰り返し、この点に言及している。

本書はもう一つ、面白い分析を示している。現在の日韓関係がこのような緊張状態に発展したのは、韓国人の思考方式にその原因があるというのである。今や、北朝鮮の核危機は深刻なレベルに達しており、一方日本は原爆を投下された過去を持っているのだから、韓国は日本と協力して、朝鮮半島の非核化を目指しそうなものだと誰もが思いたくなる。しかし、韓国は、日本と協力してこの目標を達成しようなどとはさらさら考えていないよ

うである。それどころか、70年前に終了した植民地支配の間に日本が犯したということになっている犯罪行為について、声高に罵ることの方が優先事項なのである。たいていのコメンテーターは、日本人であれ、外国人であれ、韓国を批判することは避けて、無分別に日本の非を鳴らすばかりである。韓国政府の異様な態度に目を向けようとする洞察力のあるコメンテーターは、フォン・シューラーなど、ほんの少数だけしか存在しない。本書が述べる韓国人の思考方式と行動を知れば、どのようにして感情論が理性を圧倒してしまうかが理解できるだろう。

本書は、「慰安婦合意」をも取り上げている。これは、2015年12月に、日本と韓国の間で結ばれた政府間合意であり、「最終的かつ不可逆的」に慰安婦問題に決着を付けるものだった。この合意が成立してからずっと後になって就任した韓国の文在寅大統領は、日本がすでに合意に則って、8700万ドル相当の金額を支払ったにもかかわらず、今改めて、この合意を無効にしようとしている。フォン・シューラーは、米国がこの協定を日本に押し付けるために一役を買ったのだから、忠実に履行させることにも一半の責任を負うべきだと言う。それにしても、このエピソードは、韓国人の度し難さをまざまざと描き出している。同時に、韓国人は自分より弱いと判断した相手ならとことん追い詰める国民だということがよく解るではないか。

韓国のこういう態度の根底にあるのは、自分たちが世界の真中にいるという考え方である——つまり、「ソウルは宇宙の中心であり」、「世界のすべてのものは韓国から始まった」という考え方である。たとえば、パンケーキのように焼いた野菜料理の「ブチング」（日本語で言うチジミ）はマルコポーロが盗んでイタリアへ持って行って、そこで『ピザ』になったのではないかと主張する韓国人もいる。クリスマスツリーは韓国に起源がある、と言い張る韓国人もいる。こういうわけで、韓国人の中には、世界中に向かって、クリスマスツリーの著作権料を要求しようという者もいる。フォン・シューラーは、韓国人がいかに関心中心主義であるか、また、それについてどんなに耳障りな主張をしているかについて、他にも例を挙げている。フォン・シューラーは、この種の思考方式を「優越感コンプレックス」だと言っている。中国を研究している人なら皆、中国の皇帝たちがこのような考え方をしてきたことを知っている——正統な中国人が天の委任を受けて、中華帝国から世界を支配するというわけである。韓国は何百年にもわたって中国の植民地だったから、中国皇帝の発想が韓国の支配層にも広がったのである。

ところが一方、日本が相手になると、これを劣等視する「不気味な宗教」が韓国人を擒にしてしまった。日本は韓国に比べると、「明白に」劣等であり、野蛮であると思いつく宗教だった。韓国人「慰安婦」の物語にもその意識が見られる。韓国人の言う所によると、日本人は「慰安婦」を釘の出たベッドに横たわらせ、釜茹でにし、その肉まで食べたとの

ことである。この物語はさらに、女たちは朝から晩まで兵士たちを相手にさせられた、と続く——その結果、読者は、日本軍の前線の兵士たちは、売春窟に入り浸りだったと信じ込まされてしまうのである。韓国人の思い込みを是正させてやる方法はないのだろうが、フォン・シューラーは、せめて、国際社会は、この途方もない妄想を見抜き、これを斥けるだけの分別を持ってと訴えている。

きっと、本書とフォン・シューラーに対して、反感を持つ人が出て来ることだろう。そういう人々は、「真実を告げることは『ヘイトスピーチ』ではない」と言うに違いない。しかし、韓国の小学生が教え込まれる不毛な刷り込みから何が生まれるというのだろうか。子供たちは教師から——親たちもこれに異論を唱えることはない——日本を中傷することが正義だと教育される。まさしく「自分が招いた不幸を他人に押し付け」ているのである。これが「偉大な国」を目指す韓国の取るべき態度だろうか。「鏡を見よ」とフォン・シューラーは警告する。

注：米国の虐殺、人種差別、また日本人を捕虜にするなどという軍からの命令などについては、Charles Lindbergh' s *The War Time Journals of Charles A. Lindberg* (Harcourt, Brace, Jovanovich: NY, NY, 1970) および Eugene Sledge' s, *With the Old Breed*, (Presidio Press: Novato, CA, 1981). アメリカ軍および政府が日本人の死体を冒とくして土産物にしたことに対してよくいって生ぬるいものだった。これについては Weingartner, JJ “Trophies of war,” (1992) *The Pacific Historical Review*, 61: 53-67. を参照されたい。